

## ナチズムの文芸政策について －長崎大学平和講座講義試論－

濱 崎 一 敏

### ÜBER DIE LITERATURPOLITIK DES NATIONALSOZIALISMUS －Eine Friedensvorlesung an der Universität Nagasaki/Japan－

HAMASAKI Kazutoshi

#### はじめに

本論は、筆者が1985年から1997年の長崎大学教養部廃止にいたるまでの12年間に、毎年教養部において、いく回かは長崎大学公開講座においておこなった平和講座講義のテーマをとりあげ、文章化したものである。骨子はかつてのままだが細部にいたるまで大幅に加筆訂正補足をおこなった。より一層実証的論証に意を用い、註釈もほどこした。一試論(論文)としておおかたのご批判に供したい。

教養部では全学部学生、公開講座では一般市民がその対象であった。講義では「第三帝国＝ドイツ・ファシズム(ナチズム)の概要」「ヒトラーとナチズム」「強制収容所とユダヤ人の虐殺」「ヒトラーへいたるドイツ史の要点(絵画と文学から)」「ナチズム文学の概要」「ナチズムの文学概念」「ナチズム文学の主流」などなどのテーマを多様にとりあつたが、そのうちの一つをここにとりあげたい。「文芸政策」は文学と政治の狭間の位置に、しかも双方の接点としてあって、第三帝国期の文学および政治双方の理念や有様を端的に表わすからにはほかならない。文学を論じつつ、当時のファシズム国家の全体も見えやすいという意味において、無理なく一般的な関心をもそその領域だと思われるからである。

昨今日本の国立大学はおおきく変化しようとしている。研究と教育のうち研究領域のみに没頭してきた従来のありかたを改めて、教育のほうにも意を砕くべきだという正当な指摘がようやくなされるようになった。1872年(明治5年)の学制頒布以降今日にいたるまで日本の教育には教授法がなかった、と断じても過言ではない。明治から昭和の第二次大戦敗戦までは、輸入翻訳学であり、であるがゆえに丸暗記の教育であり、教育勅語にしたがった道徳教育であった。敗戦後の今日も基本的にはこの傾向を脱しきれてはいないのであるか。教授法不在の感は、ことに今現在大学教育においてつよい。欧米の先進的な教育における教授法を一瞥ないしは一度体験するだけで容易にわかるほど、その差は画然たるものである。

ドイツの大学における講義は、周知のように、ほとんどがあらかじめ用意された原稿を読みあげる形態である。ドイツ語の「講義」を意味する単語 *Vorlesung* は本来「読んで聞かせること」を意味する。本論は、「読んで聞かせる」ために、まずは文章化するという試みに挑戦しつつ、誠にささやかではあるが、教授法構築論議の一助ともなるよう願っているのである。

## 講義試論「ナチズムの文芸政策について」

ドイツ・ファシズム、すなわちナチズムの時代に「ナチズムの聖典」と称せられた著作が三つあります。一つはアドルフ・ヒトラー (Adolf Hitler, 1889-1945) の『我が闘争』2巻 (Mein Kampf, 2Bde. 1925年に第一巻、1927年に第二巻の初版)、もう一つはアルフレット・ローゼンベルク (Alfred Rosenberg, 1893-1946) の『二十世紀の神話』 (Der Mythos des 20. Jahrhunderts, 1930)、そしてさらにもう一つはハンス・グリム (Hans Grimm, 1875-1956) の『土地なき民』 (Volk ohne Raum, 1926) です。

ヒトラーおよびローゼンベルクの著作については後程検討をくわえることにします。まずはハンス・グリムの小説『土地なき民』について述べますが、これを検討していく過程のなかでは種々さまざまな問題があらわになってきます。つまり、当時ドイツという国がおかれた時代史的状况、ナチズムへいたる経過、さらには日本におけるドイツ文学研究、日本における学問の「輸入学」としての歴史的様相などですが、もちろんのこと、そもそも「ナチズム文学」とは何かという定義づけの問題にふれつつ、やがては本題の「文芸政策」へ落ちていくこととなります。

ハンス・グリムの『土地なき民』は1500ページにもわたる歴大な小説で、当時ドイツにおいて世評は「ドイツ民族の運命の書」「ドイツ民族の最初の偉大な政治小説」という評価をあたえ絶賛しました。1926年初版が出されたこの小説は、9ヵ月で1万部2年後には4万部、ヒトラーが首相になって政権をにぎる1年まえ、つまり1932年には6万5千部、そしてヒトラー政権誕生の3年後1936年には実に36万5千部の発行を誇ったのでした。

作者であるハンス・グリムというこの小説家は、1875年北ドイツのヴィースバーデン (Wiesbaden) という地で生まれ、進学高等学校 (Gymnasium) 卒業後イギリスに赴き商法を学びました。その後商人になる目的で、南アフリカの英領喜望峰植民地にわたります。そしてこの地南アフリカで22才から36才まで約15年間を過ごします。最初の4年間は商館勤め、残り10年余を独立の貿易商人として生活を営んだのでした。このアフリカ生活の体験をハンス・グリムは小説『土地なき民』に描いたのです。

主人公コルネリウス・フリーボット (Cornelius Friebott) は小説の題目どおり「土地なき民」として、つまり北ドイツの農村で生活すべき耕地を失った人間として新天地をもとめて南アフリカへわたります。そこでは、イギリス人が勢力をふるいイギリス人以外の人々、ことにドイツ人は目の敵のように圧迫されます。ドイツ人には安住の地がないのです。フリーボットは意を決して軍隊に入隊します。ドイツの植民地、西南アフリカ開発のために前後2回戦闘にくわわってイギリス軍と闘うのですが、第一次大戦 (1914-1918) の勃発、敗戦により独領西南アフリカはついに失われドイツ人たちは再度文字どおりの「土地なき民」になってしまいます。主人公コルネリウス・フリーボットは故国に帰り、ドイツ民族を救済する唯一の道は植民地の獲得であると説く遊説家となって各地をまわるのですが、ある時 (1923年) 反対派の投石によって落命することになります。きわめて簡単にあら筋を述べるとこのようになります。主人公の運命は当時まさに「ドイツ民族の運命」そのものを表わしたものとして受け入れられました。

事実、ヨーロッパにおける後発国としてドイツは19世紀後半から20世紀初頭にかけて急速に近代化工業化を推し進めました。その結果、先祖伝来郷土の「土」に生きてきた農民

および職人たちが都市へ吸収されていくことになりました。やむなく都市労働者にならざるおえなかったのです。とり残された土地は大地主や大資本の所有となっていきました。郷土に、それでもなおかつしがみついていた農民職人たちであっても、ふたたび飛躍的な経済の進展とともに、さらにまた食ってはいけない状態に追い込まれていきました。意に反して故郷の土地を捨てなければならなかった都市労働者たち、そして郷里に残された零細な人々に、新天地を渴望する憧憬の念が生じてくるというのは自然ななりゆきでした。こうした農民層、職人層を核とした国民大衆による新天地つまり植民地獲得のつよい願望が、ヒトラー・ナチズムの対外侵略という国家政策を呼びよせ、正当づけ推進していく重要な基盤になったのです。

ドイツ民族を「土地なき民」と定義づけて対外侵略を目的とした戦争を正当化し、かつまた遂行していく気運、思潮、思想形成に重要な役割をになったハンス・グリムのこの小説は、1940年（昭和15年）12月日本においても翻訳刊行されました。しかも刊行1年後には108版を数えるほどの売れ行きでした。翻訳者は戦後も高名なドイツ文学者で星野慎一という人でした。

かれは日本語翻訳書の「あとがき」において次のように述べ著者ハンス・グリムを絶賛しました。「ハンス・グリム(Hans Grimm)は『土地なき民』(Volk ohne Raum)によって獨逸文學史上に不朽の名をとゞめることになった。この作品の書かれたのは一九二六年で、もう十四、五年の昔のことではあるが、今日でも獨逸人みづからが新獨逸民族の聖典であると言っているやうに、この作品は獨逸民族の運命を赤裸々に描いた骨の髄まで獨逸的な作品である。」<sup>1)</sup>

かれは、この「あとがき」において以下のようにも述べ、この作品とともに当時のナチス・ドイツにたいするつよい共感の情も披瀝したのです。「太古から受けついで来た獨逸人の血縁の絆を、如何にして子々孫々に傳へて行かねばならないか、という根本的な問題にたいする嚴かな解答をこの小説は與えてくれる。さういう意味からもこの作品の主人公コルネリウス・フリーボットは、獨逸民族自身の運命を代表してゐるのである。この小説を一讀すると、獨逸がつひに蹶起して、あらゆる困苦と戦ひながら邁進せねばならぬ悲壯な気持ちのはつきりと分かるやうな氣がする。」<sup>2)</sup>

ドイツ文学者星野慎一氏は1941年（昭和16年）には「ハンス・グリム」という表題の論文を書き、さらにまた次のようにも述べています。「この作品がグリムの文名を一躍有名にしたばかりではなく、また文學史的に見て永遠の生命を持つものであり、現時獨逸における最大の政治小説であることは争われない事實である。しかも、この作品の生まれた當時の社會情勢、文壇の動き等をつぶさに觀察するならば、餘計作家としてのグリムの卓抜な精神に觸れないわけには行かないのである。彼が筆を取りはじめた頃には、おそらくヒトラーといふ名前さえ知る人もをらなかつたであらう。思想的にも自由主義、左翼主義の旺盛の頃であつて、文壇の動きもやはりその大勢に順應してをつた頃である。今日の時代において、民族主義をふりかざし民族文學を云々することは、まことに易々たるわざではあるが、終始一貫その主義に變りなく、獨逸を救うためにはこの一途あるのみと、すでに二十年も前に喝破したグリムの人がらには美しい獨逸精神が宿っている。」<sup>3)</sup>

かれは、ハンス・グリムの『土地なき民』を、このように「永遠の生命を持つ・・・獨

逸における最大の政治小説」と評価しました。ドイツにおけるのとまったく同じ最大級の評価であったわけです。また、グリムの精神である民族主義を「卓抜な精神」「美しい獨逸精神」だとして褒めたたえているのです。

以上のように、今日ではナチ作家の代表ないしは典型とされるハンス・グリムとその文学作品とは、ナチス・ドイツにおけるのとまったく同じように、日本においても文学研究家の専門家によって高く評価され、多数の版をかさねて刊行され日本人一般読者にも絶大な好評を博したのでした。

このことは、今日平和講座に参加したわれわれに、多様な問題を投げかけてくれます。ドイツ文学者星野慎一氏、当時の読者たちを厳しく批判にさらせばそれですむといった問題ではありません。1933年ヒトラーが政権の座についてから1945年のドイツおよび日本の敗戦にいたるまでの間、邦訳されたナチス作家たちの作品はほぼ80冊以上だといえます。<sup>4)</sup>多くのドイツ文学者たちが、これらの翻訳にかかわりましたし、ナチ文学を好んだ日本の読者もまだまだ多数いたことになります。

したがって問題の一つは、ナチ文学が無批判に日本という土壌に輸入されたという問題です。これは、ドイツ文学（外国文学）研究のありかたそのものを問う問題でもあります。この時代は、ご承知のように、日本の状況もきわめてナショナリスティックでありましたし、戦争の時代でもありました。日本とドイツとの歴史的、政治的状況は類似していました。こうした類似の状況に、研究者も読者も埋没してしまっていた、この状況と時代を越える眼をもつことができなかつた、とすることができます。しかし、実は、日本において明治の欧米近代化以降とりおこなわれている学問が一体何か、というより厳密な観点を視野にいれつつこの問題を考えてみますと、その根はもっと深いところで明らかになります。すなわち、ドイツ文学研究は概ね大正時代末期、1920年代の半ばからようやく本格的になりました。東京大学の独文学講座の研究者たちが「東大独文学会」を創設して学会研究誌第一号の『獨逸文學』第一輯を刊行したのが大正15年、つまり昭和元年で西暦1926年でした。これが今日の日本独文学会の出発とも言えます。研究誌『獨逸文學』を読めば明らかですが、出発の当初から日本の独文学研究は、研究方法も作品評価の方法もすべてドイツの研究者たちに学んできました。言わば受け売りの学問でしかなかったのです。日本という国に住むわれわれ研究者独自の研究方法を自らの基盤のうえに確立していくという作業は、それ以降、概して実際には今日にいたるまでなかなか始まっているとは言い難い。したがって、この問題は、かつてナチ作家たちを無批判に翻訳輸入した研究者たち、読者たちだけの問題ではありません。まさに今日に生きるわれわれの問題であります。

日本のドイツ文学研究が「輸入翻訳学」として自分自身の基盤をもたなかつた、という問題は、その視界を拡大してみますと、日本で今日いとなまれている他の学問にしても概ね同じ状況だと言えます。欧米近代の学問は明治の近代化とともに日本へ導入されたのですから、100年余の浅い歴史しかもってはいないという意味において、こう断じてもしつかえないはずで

われわれは、経済、教育、医学、工学、水産、薬学などどのような専攻分野を選んだ者も、われわれ自身の学問の力、批判の力を構築していかなければなりません。これははなはだおおきなテーマです。大問題です。一朝一夕には達成されない。しかし、われわれは、

足元から発想をおこない、自らの頭で考え、日常の行為へとむすびつけていく姿勢を獲得しようと、なにごしかの努力をすることはできます。それが、時代の流れに埋没して疑問を発することを知らない姿勢を阻止することになるのでしょう。長崎大学平和講座に参加する意味は、講義をおこなう教師側にしろ聴講する側にしろ、まさにこの点にあるのだと思います。

問題の二つめは、では一体どのようにすれば実際にナチズム文学を見分けることができるのか、という「ナチズム文学の定義づけ」の問題です。一挙に完璧な結論へいたることはできないのですが、以下のように思索の手順をたどることは可能です。

「ナチズム文学」の定義づけを試みるばあい大切なことは、単に研究者たちの定義づけにそのまま従わない、ということです。あくまでも自分自身の考察によって生み出された規範から判断、規定づけをおこなうということです。この基本姿勢を保持してこそはじめてナチズム文学と自分との真摯な対決が可能になります。

事実問題として、ナチズム文学自体そのものに関する研究書や叙述は、意外なことで予想とは異なりその数ははるかに少ないのです。ことに日本においては、ドイツにおけるよりはるかに少ない。日本のドイツ文学研究者たちは、現在わずか数人程度しかこの研究テーマに関心をもっておりません。したがって、みなさんが読むことができる日本語の文献書籍も数少ないのです。手近なところで、ドイツ人もしくは日本人の研究者たちによって書かれたドイツ文学史を見ましても、大体のところ、第三帝国期（1933-1945）を中心にしたナチズム文学の部分は欠落しているというのが実情です。たまに運よくそうした叙述に出会うことがありましても、はなはだ抽象的でこの文学が果たした歴史的な機能と役割、要素の詳細といった大事な部分はよくはわからないことがおおいと言えます。

このようにナチズム文学の解明が立ちおけている、もしくは等閑にふされているそのおおきな原因は、この文学は内容、形式の両面において、つまり思想も芸術的技法もとるにたりないつまらない存在だと一般に考えられているからです。ナチズムの残虐という悪に加担した文学の研究には専念したくないという風潮もあります。

しかし、ここにはナチズム文学は1945年の敗戦とともに即座に消滅してどこかへ消え去ったわけではない、という問題があります。ハンス・グリムの『土地なき民』の発行部数は敗戦ほぼ10年後の1956年には76万部、敗戦20年後の1965年78万部にたったと言います。<sup>51</sup> グリムとならびナチ作家の双璧と称せられたエルヴィン・グイド・コルベンハイヤー（Erwin Guido Kolbenheyer, 1878-1962）の全集14巻は、敗戦12年後の1957年から刊行され、各作品の普及版が戦後の時代長きにわたって読みつづけられたとも言います。<sup>52</sup> 戦争遂行の論理、侵略の論理が敗戦という節目を境に煙のように立ち消えてしまうということはありません。いつまでも生きつづけていると考えるほうが正しく現実的です。

ですから、われわれは、過去というよりは今日の問題として、少ない研究書や叙述を手がかりに「ナチズム文学とは何か」という定義づけに専念しようとし、現実の問題として、警戒の眼と感性を研ぎ澄ましておこうとします。すると、ある研究者は、ある作家をナチ作家と呼び、他の研究者はこの同じ作家をナチ作家とは考えない、もしくはナチ作家の特質を故意に過小評価する、あるいは無視するという具合です。読む者ははなはだ戸惑ってしまいます。確かにおしなべてどの研究者からもナチ作家と規定づけられている作

家たちの一団もあります。しかし、これらの作家たちが何故にナチ作家であったのか、その作品の内容、傾向、思想および作家の社会的な振る舞い、ありかたなどに関する分析は一様ではありません。種々の論議が多様にわかれてしまいます。かならずしも統一の単一的にはなっておりません。

したがって、われわれは、再度申しますが、単に理念の問題としてではなくて実質的な意味においても自分自身の立場からナチ作家、ナチズム作品を規定づける観点を獲得していく必要があります。このことは、同時にナチズムないしはファシズムを規定づける観点を獲得していこうとすることでもあります。こうしてナチズム文学にかかわるわれわれ自身のいわば批判の文学論を構築していくという、おおきな目標にむかって一步一步進もうとするとき、これまでにとりおこなわれてきた研究の方法が、われわれの考察の貴重な参考になるというのは言うまでもありません。

ナチズム文学の研究方法に簡単にふれておきますと、以下のように大体三つの方法があります。<sup>7)</sup>一つは、ナチズム文学というのはナチズムという政治領域に直接、完全に規定された文学であって、ナチズム文学の独自性、つまり独自の美学は存在しないという立場です。<sup>8)</sup>ナチズム文学は、それ以前にすでに存在していた素材や技法を単に利用したにすぎない折衷主義である。したがって、文学領域内部の検討には値しない、とこの立場は主張します。問題であるのは、ナチズムという全体主義に支配された当時の社会総体のありかたである。それは独裁者であるヒトラーへむけての総体的統合をめざすものであり、目的とする侵略戦争を美化するために、全国民の公的私的生活を耽美化しようと目論むものであった。ナチズム文学もまたこの意図的なメカニズムの一面にあつて、戦争を美化する役割を担った存在にすぎなかった、というのです。この立場においては、ナチズム文学は検討するほどの価値のないいわばつまらない存在と見なされ、文学という限定された領域においては詳細な説明はおこなわれないうことになります。

第二の立場は、ナチズム文学はナチズムという政治領域に規定された文学である、と考えるという意味においては第一の立場と同じです。異なるのは、ナチズム文学を文学領域独自の問題としてとらえ説明しようとする姿勢です。したがってこの立場は、文学のナチズムもしくはファシズムを分析説明しようとしします。ただし、ナチズム文学はナチズムに規定された文学であるがゆえに、文学からはファシズムという政治領域の本質はとらえられない。まずナチズム・イデオロギーの要素と機能とを分析して、それから文学の解明にむかうべきだ、とこの立場は考えます。<sup>9)</sup>この結果、ナチイデオロギーがそのままナチズム文学の要素として摘出されることになるのです。<sup>10)</sup>この立場は、ナチズム文学をナチズムのプロパガンダの道具としてとらえているのです。

第三の立場は、ナチズム文学を文学領域独自の問題としてとらえようとする、という意味においては第二の立場と同じです。しかしながら、第一の立場とも第二の立場とも完全に異なっているのは、ナチズム文学をナチズムという政治体制によって規定された文学とは考えない、という点です。ナチズム文学は、19世紀末から、否それどころか19世紀初頭の浪漫主義の時代から、徐々に発育をはじめ固有の理念体系と表現力を獲得しつつ、文学自らがナチズムという政治体制を招き入れる重要な一助となったのである。そしてナチズム体制に生命を与えることにより自己実現をはかったものと定義づけられる。<sup>11)</sup>したがっ

てこの立場は、ナチズムという政治概念にたいしてナチズム文学を正面から対置して、文学の自律性を強調するものである、とすることができます。

ナチズム文学とは何か？ナチズム文学とはどのような文学を指すのか？という問題を考察する際のとらえかた、方向性のみを以上三つの立場に分けて触れておきました。

すでにおわかりのように、これら三つのいずれの立場においても、ナチズムという政治概念とナチズム文学とは、当然といえば当然のことですが、かならず密接な関係にあるわけです。この密接な関係の具体的な有様、内容を探索することにより「ナチズム文学とは何か？」というわれわれの最終的な目標である問いに肉迫できるのではないか、それがわれわれ自身の一つの学問的方法になりうるのではないか、とこのように考えることができると思います。

こうして、当時ナチズムという政治イデオロギーもしくは体制は、文学領域と事実上どこで接点をもっていたかを考えてみますと、明らかにそれはナチズムの文芸政策(Literaturpolitik)においてでした。したがって、ナチズムの文芸政策はどのような様相を呈していたのかを本講義の本題としてこれからとりあつかいたいと思います。

ナチズムの文芸政策は、自明のことですが、ナチズムという基盤から生じました。したがって、この文芸政策を考察するには、まずはナチイデオロギーという基盤に検討をくわえ、それからこのイデオロギーによって立つところの芸術観を解明し、これら理念の総体が文芸政策として実現されたその様相を整理するという、三段階が必要であると思われる。

もう一つの「ナチズムの聖典」、ヒトラーの『我が闘争』にはナチズムの世界観の根本が述べられています。この世界観は民族主義であるわけですが、一番の問題は、これが生物学的科学的に何一つ根拠のない人種イデオロギー(Rassenideologie)に貫かれているという点です。ヒトラーによりますと、世界の個々の人種はそれぞれ「価値」に差異がある。個々の人種のみならず個々の人間にさえ「価値」に差異があるというのです。<sup>12)</sup>これは言わずもがな言語に絶する差別的非合理にほかなりません。しかし、このイデオロギーを保持してこそ、ナチズムの体制は平然と武力をもって他の国々を侵略できたし殺人者ともなることができた。ドイツ国内においても、国民すべてにピラミッド型の支配を貫徹しようとする政治的奸策を企画、実行することができたわけです。

では、世界の人種の序列づけはどのように考えられたかといいますと、さほど細かく厳密には述べられてはいません。具体的には、侵略戦争の過程のなかで、その都合に応じて、この人々は抹殺すべきである、抹殺はしないが教育も医療も与えないでよい人種である、あるいは支配統治をおこなえばそれで十分だ、といった具合に定めたもののように思われます。論理として、整頓がなされているわけではないのです。こうした筋道の立てようもない非合理を合理的に整理できるはずもありません。

『我が闘争』のなかで明示されている人種の序列づけは、おおまかに三段階になっています。<sup>13)</sup>これによりますと、頂点に位置するのは「アーリア人種」です。アーリア人種というのは、元々は言語学の概念であったものを生物学的人種論領域に移しかえて捏造した言葉です。つまり、「アーリアン」もしくは「アーリアン語」というのは祖語を「インド

ゲルマン語」とする一語族の名称にすぎなかったのです。ナチスはこれを端的には白人種総体を指す言葉として通常使いました。ゲルマン民族、つまりドイツ民族は、このアーリア人種のなかの一分枝に過ぎないと言いつつ、ヒトラーはアーリア人種のなかでも“雑種化”していない“純粋種族”としてゲルマン民族をもっとも上等の種族だと考えたのです。したがって、ナチ関係者たちが「アーリア人種」というばあいには、白人種のなかでも“最上等”のゲルマン民族を指すことがおおいと言えます。

このアーリア人種、ゲルマン民族は、唯一文化を創造する能力をもっている、ということです。ですから「文化創造者」という名称を自らに与えました。ゲルマン民族の対極にあるのがユダヤ人種です。ユダヤ人は「文化破壊者」と名づけられて、周知のように老人・女性・子供にいたるまで抹殺の対象とされました。日本人をはじめ非アーリア人種は「文化支持者」だと特徴づけられました。つまり、アーリア人種の創造した文化遺産のいわばおこぼれにあずかるようにして、かろうじて文化を形成している人種だということです。

こうして、日本についてはヒトラーは次のように言及しています。「おおくの者たちが言うように、日本というのは、その文化にヨーロッパの技術を取り入れたというのではなくて、ヨーロッパの科学技術が日本の個性によって縁どりされているだけのことなのだ。・・・ヨーロッパとアメリカとが没落したと仮定して、今日以降日本へはアーリア人のどのような影響もこれ以上およぼされないとするならば、科学技術にみられる今日の日本の興隆は短期間であればなお継続していくであろうが、早晩かならずや泉は枯れはてて、日本的生きざまは勝利することになったとしても、しかしながら文化は硬直化し70年前にアーリア人の文化の波によってたたき起こされたあの眠りの中へとふたたびうち沈んでいくに違いなからう。」<sup>14)</sup>

ヒトラーのこうした人種イデオロギーにとって、現実的でもっとも重要な課題は何であったかといいますと、それはゲルマン民族を純粋種族として保ち存続させるということでした。そのためにこそ第三帝国というドイツの国家体制が存在するというのです。ヒトラーは、国家とは「目的にいたる手段にすぎず」(nur ein Mittel zum Zweck)、国家の目的とは「人間の人種としての存在を保持することだ」(Erhaltung des rassischen Daseins der Menschen)と明確に述べています。<sup>15)</sup> こうした考え方にに基づき、ヒトラーの支配した第三帝国は、ユダヤ人をはじめ多数の非ドイツ人、障害者たち、精神病患者、ロマ・シンティ(俗称ジプシー)などなど、ゲルマン民族を純粋に保つという目的にとって障害要因となると考えられた人々を殺害し、排除し、あるいは強制収容所へ暴力的に隔離し、無償の強制労働に従事させました。あるいはまた、対外的には侵略を断行し、侵略した領土には「アーリア人種」たるゲルマン民族の移住植民をはかったのです。こうした暴力は、しかし一般のドイツ人自らにもおよびました。おおかれ少なかれナチ体制に反した思想・立場をもつドイツ人たちは、ナチスによって「精神的ユダヤ人」というレッテルを貼られ、同様の運命をたどらされたのです。

ただし、人種イデオロギーは、ヒトラーおよびナチスが突然発明したものではありません。歴史的にみて、ヨーロッパにははなはだ長い前史があります。『人種不平等論』(1853および1855)を主著とするフランス人のゴビノー伯(Arthur Comte de Gobineau, 1816-1882)、イギリス人のヒューストン・スチュアート・チェムバレン(Houston Stewart



Chamberlain, 1855-1927)、ドイツの歴史家ライチュケ(Heinrich von Treitschke, 1834-1896)らが直接の先駆者とされます。前二者はドイツの著名な作曲家、リヒャルト・ワグナー(Richard Wagner, 1813-1883)とも個人的な親交がありました。ことにチェムバレンはワグナーの娘、エヴァの婿でもありました。つまり、反ユダヤ主義はゴビノー以降ワグナー・サークル、ワグナー自身そしてチェムバレンらをへて飛躍的な高まりをみせ、市民階級のなかへ浸透していったという側面がありました。<sup>16)</sup> チェムバレンは『十九世紀の基礎』(1899)をドイツで出版しロング・セラーをかちとったのですが、この書の内容、思想的枠組みから多大な影響を受け世にでたのがアルフレット・ローゼンベルクの『二十世紀の神話』であったのです。

ヒトラーが政権を掌握する1933年の3年前、1930年に出たローゼンベルクの『二十世紀の神話』は6年後には50万部を突破しました。これは著者自らが書いた「五十萬部出版の序」<sup>17)</sup>で明らかです。当時ドイツの人口はおおよそ6000万人ですから驚くべき数字だと言えます。原典が700ページ余のこの分厚い本のなかで、ローゼンベルクは人種、民族、国家、法律、愛、性、宗教、学校などあらゆる分野・事柄について饒舌にナチズムの思想を語っていますが、第二篇「ゲルマン藝術の本質」においてかれは信奉する芸術観について詳しく述べています。

ローゼンベルクは序文において、この本は「人種的世界考察」<sup>18)</sup>を目的としていると書いています。驚くべきことに、かれは芸術でさえも人種イデオロギーにしたがって価値評価を下そうとします。かれの“美学理論”をかいつまんで紹介しますと、世界で“最上等”の民族つまりゲルマン民族(「北方人種」とも表現されます)が創造した芸術は最上等である。“最下等”のユダヤ人が生み出した芸術は最下等、どころか芸術という名に値しない。芸術の埒外に排除されます。芸術を芸術自体がもっている自律的価値では評価しない。あくまでも人種の序列づけにしたがって芸術の価値まできめてしまうのです。(こうした発想は一見はなほだ奇妙で不届き至極に聞こえますが、今日われわれの日常の周辺にも同様の現象が少なからず見てとれます。つまり、出自や学歴、出身大学、職業、社会的地位、貧富、国籍などによって人々の序列づけをおこない、この序列づけにしたがって人物、行動、種々の業績などの評価をするというやりかたです。)

ローゼンベルクにとって、しかし、ゲルマン民族以外の民族が創造した優秀な芸術が世界のいたるところに存在しているということは、無視できない事実でした。さしずめ一番気になるのは、今日ヨーロッパ美学の源泉ともいえるギリシャ芸術でした。かれは、ギリシャ芸術とゲルマン芸術との比較検討を懸命におこないます。ローゼンベルクによりますと、アクロポリスのパルテノン神殿をはじめとするギリシャ建築、彫刻は静力学的事実の様式であり、ゴシック建築をはじめとするゲルマン芸術は動力学的意志的人格的であるといえます。<sup>19)</sup> ゲルマン芸術の典型とされるのは、その他画家のルーベンス、レムブラン、デューラー、作曲家のベートーベン、ワグナー、詩人のヘルダーリン、シラー、そして哲学者・思想家のニーチェ、先程述べました作家のグリムやコルベンハイヤーなどなどです。これらゲルマン芸術に表現されている「意志」とは「民族の意志」だといえます。がしかし、それは「かの英雄的道徳的意志と共に一種の根源的謎であることを承認せねばならぬ一つの力である」<sup>20)</sup>とも言うのです。つまり「民族の意志」という概念は著者の口

ーゼンベルクにとっても「謎」であるというのですから、科学的ではありません。もともと『二十世紀の神話』の底流骨子となっている人種イデオロギーは、科学的実証性をこえた信仰の領域であるというのは、著者自身が多様な表現をもちいて再三強調するところです。「信仰」をもってこそはじめて「二十世紀の神話」、すなわち新しい共同体の世界が創造構築される。それは、日本における天皇の卓越した尊厳さ、これを頂点として形成される国の体制が、科学的証明や説明をはるかにこえたいわば信仰の領域だという、ファナティックな天皇制信奉論者の論議とその意味では類似してきます。

ローゼンベルクの信奉する「血の信仰」、これが失われれば世界は墮落と破滅へむかう。芸術領域では、伝統的な形式(Form)を喪失した「混血児芸術」、「デカダンス芸術」たる表現主義、ダダイズム、キュビズムなどが台頭することになる、と言うのです。「血の信仰」にみられる非合理主義は、しかしながら、西洋近代の堅牢に確立された合理主義にたいするアンチテーゼとしての機能を果たそうとしていたと考えられます。『二十世紀の神話』についてヘルマン・グラウザーは「これはおそらく、かつて書かれたもっとも馬鹿げた本の一つであろう。だが、意識的に半インテリと非インテリの大衆を目標としているだけに、もっとも危険な本の一つといえる」<sup>21)</sup>と述べています。西洋近代の合理主義は、周知のごとく、さまざまな疎外状況をわれわれに突きつけています。がしかし、これを問おうとするとき、安易な「信仰」ではけっして有意義で、進歩を約束する成功にはいたらないという歴史の悲惨な教訓を、われわれはここに再認識しておきたいものです。

以上、ナチイデオロギーとこれに基づく芸術観について考察してきました。

以下には、ナチズムの文芸政策を、歴史的な事象として具体的に整理しておきます。ナチズムの文芸政策を実際に具体化、現実化していったのは、国民啓蒙宣伝相(Reichsminister für Volksaufklärung und Propaganda)のヨーゼフ・ゲッベルス(Joseph Goebbels, 1897-1945)でした。国民啓蒙宣伝省といいますのは、ヒトラーが政権掌握直後の1933年3月ゲッベルスのために新設したものです。つまりナチ政権の文化統合政策のすべては当初からかれ一人にまかされたのでした。ゲッベルスの「芸術観」は次のようなかれの言葉に明確に表現されています。「民族性こそが、・・・健康な芸術のいずれもがそこから生じる、生じなければならない土(Boden)である。われわれは芸術に、種を同じくする血の共同体(Blutgemeinschaft)のもっとも高度で創造的な表現を見るのである。民族がこの血の共同体を純粋にたもてばたもつほど、それだけ一層民族は、より偉大な芸術を造りあげるのである(ゴチック様式)。」<sup>22)</sup>

民族を純粋にたもてばたもつほど、それだけ一層芸術も偉大なものになる、というゲッベルスの考え方は、反ユダヤ主義、反社会主義、反マルクス主義、反民主主義、反リベリズム、反平和主義のようにあらゆる政治的理念を生み、「敵の排除」を企てていくのでした。「民族を純粋にたもつ」というのは、「種としての血筋の純粋さをたもつこと」と同時に「体制に反したり体制を批判したりする分子がいないこと」を意味していたからです。つまり、かれらが日常の政治領域でめざしたのは「民族主義」に基づく「全体主義」であったのです。文芸政策上の生々しい有様は、次にあげる三つの事件が象徴的に表わしています。

その一つは、「プロイセン芸術アカデミー」(Preußische Akademie der Künste)の改組事

件でした。このアカデミーは、1696年フリードリッヒ三世によって設立され、以来古い伝統を誇っていました。時代を代表する芸術家たちが保護され、かれらの活躍の基盤でした。元々このアカデミーには、美術部と音楽部の二部門しかなかったのですが、1926年春「文芸部」(Sektion für Dichtkunst)が付設されました。設立時の会員はトーマス・マン(Thomas Mann, 1875-1955)、マンの兄ハインリッヒ・マン(Heinrich Mann, 1871-1950)をはじめ26名でした。がしかし、この「文芸部」も1933年1月30日ヒトラーが政権をにぎるや否やわずか4ヵ月で改造されてしまいます。まずは会長であったハインリッヒ・マンが合法的ながら会長職と会員資格を剥奪されます(2月15日)。次いでアカデミーから全会員に親展の手紙が発送されました(3月14日付け)。俗に言う「踏絵」です。つまり、新体制(ナチ体制)においても引きつづき「芸術アカデミー」に留まるのかどうか、留まるのであれば、新体制にたいしあらゆる意味で忠実である義務が生じる、イエス(Ja)かノー(Nein)ではつきり返答しなさい、というものです。作家たちは一人一人が主体的立場を問われたのです。こうして粛清された“都会的・ユダヤ的・左翼的作家”はマン兄弟をはじめ13名、すなわち文芸部会員の半数にのぼりました。この穴を埋めるかたちで新会員になったのが、ナチの党員作家やシンパ作家たちであったのは言うまでもありません。改造後の文芸部は「ドイツ文学アカデミー」(Deutsche Akademie der Dichtkunst)と改称されました(6月8日)。当時の新聞はこの文芸部の改組事件を「以前のきわめて非民族的構成状態から、民族意識的かつ種の正当なる(artgerecht)生命体に改造された」<sup>20)</sup>と報じたのでした。

さらに三ヵ月後の9月には、「帝国文化院法」なる法律が制定されます。国内のあらゆる文化活動を統合するための国家機関「帝国文化院」(Reichskulturkammer)を設置するためでした。この中には帝国著述院、帝国新聞雑誌院、帝国ラジオ院、帝国演劇院、帝国音楽院、帝国造形美術院の6部門がおかれ、国民啓蒙宣伝相ゲッベルスの管轄下、芸術・創作活動をおこなう者すべてが加入しなければなりません。したがって、「帝国文化院」の設置により、先に改組されたばかりの「芸術アカデミー」は有名無実の存在になりました。「芸術アカデミー」の改組は、単に味方と敵の区別を明らかにするための狡猾なセレモニーでしかなかったわけです。こうして「宣伝省」の強制管理に違反した者は、除名処分を受け一切の創作活動および職業活動を禁止されることになりました。日常の暮らしさえ奪われたのです。

このばあい、具体的に芸術家たちの何が問われたのか、誤解をおそれずに敢えて述べますと、第一義的には、かれらの不明確な思想性や表現が問われたのではない。「踏絵」の例が示すとおり、かれらの社会的政治的立場(Position)、主体の在り方が問われたのでした。ユダヤ人はユダヤ人であるという理由だけで排除されました。さらに、民族という名の体制に反する立場を堅持した人々、ささやかではあっても実際に行動を起こした人々が排除されたのです。思想性や表現自体が、詳細・厳密に吟味検討されて弾圧をこうむることになるのは、その影響力が許容の範囲をこえたばあいに限ります。決断のあいまいなおおかたの反体制的思想、表現などは、体制にとっては痛くもかゆくもない。それどころか野放しにしておいたほうが、権力の鷹揚さ、自由、民主性を誇示するためには都合がよいと言えます。

ナチズムの文芸政策として「もっともスペクタクルな活動」と称せられるのは、1933年5月10日夜首都ベルリンをはじめドイツ各地の大都市でおこなわれた「焚書活動」(Aktion

der Bücherverbrennung) でした。

これは単に町中の一般市民によって発起されたものではありません。書籍文献類をもっとも大切に考えているはずの教授たちや学生たちによって実行されました。先進的な現代社会では信じられないような事件です。当代一級の著作物、おおきな影響力をもつ著作物が、民族という名のナチ体制に反するという理由で焼かれたのでした。首都ベルリン、フランツ・ヨーゼフ広場では、燃えさかる炎に投げこまれた書籍は2万冊をこえるといわれます。マルクス、フロイト、マン兄弟、ブレヒト、トホルスキーらの本が“非ドイツ的”“非道徳的”“頹廢的”とみなされ焼きつくされました。

以上、ナチズムの思想内容を問い、芸術観を分析し、本講義のメイン・テーマとして文芸政策をとりあつかってきました。われわれの彼方の目標は「ナチズム（ドイツ・ファシズム）の文学」を定義づける評価の能力を身につけるということです。それは、いわゆる「ファシズム」と呼ばれる体制に抗して身構えを獲得するという意味でもあります。それはまた、日常的には、われわれ自身の人、命としてのありかたを不当に阻害する要因に意識的になろうとすることです。つまり、「人としての意識」、「人権の意識」こそが唯一人生の豊かさを保障するものだということを、もう一度考えてみたいのです。

Vielen Dank für Ihre Aufmerksamkeit!

#### Anmerkungen

- 1) 『土地なき民』、星野慎一 訳、鱒書房、昭和十六年（108版）、S.457.
- 2) a.a.O.
- 3) 星野慎一「ハンス・グリム」、『獨逸文學』5、第一書房、昭和58年（復刻）、S.70-71.
- 4) Vgl. 池田浩士『ファシズムと文学。ヒトラーを支えた作家たち』、白水社、1978年、S.304.
- 5) Vgl. a.a.O., S.99.
- 6) Vgl. a.a.O., S.148.
- 7) Vgl. 濱崎一敏「第三帝国におけるナチズム文学研究」、『長崎大学教養部紀要』人文科学篇 第25巻 第2号、1985年、S.147ff.
- 8) Vgl. Rainer Stollmann: Faschistische Politik als Gesamtkunstwerk. Tendenzen der Ästhetisierung des politischen Lebens im Nationalsozialismus. In: Die deutsche Literatur im Dritten Reich. Themen, Traditionen, Wirkungen, Hrsg. von Horst Denkler u. Karl Prümm, Reclam 1976, S.83ff.
- 9) Vgl. Wolfgang Wippermann: >Deutsche Katastrophe< oder >Diktatur des Finanzkapitals<? Zur Interpretationsgeschichte des Dritten Reiches im Nachkriegsdeutschland. In: a.a.O., S. 9 ff. Und auch ders.: Geschichte und Ideologie im historischen Roman des Dritten Reiches. In: a.a.O., S.183ff.
- 10) W. ヴィッペルマンによると、ナチズム文学は、たとえば歴史小説のジャンルにおいて

は人種イデオロギーを中心点としながら以下のような要素をもっている。①フューラー思想(Führergedanke)②エリート思想(Elitegedanke)③帝国思想(Reichsgedanke)④「血と土」のモチーフ(Blut- und Boden-Motiv)⑤北方主義(Nordismus)⑥反社会主義および反民主主義(Antisozialismus und Antidemokratismus)⑦「東方進攻」の要求(Aufforderung zu >Drang nach Osten<)。ただし、これらの要素の一つもっているからという理由で、ある歴史小説をナチズム文学と規定づけることはできない。中心に人種イデオロギーがあったうえで、これらの要素がどれだけ束ねられているか、ラディカルさの度合いはいかほどかが観察されるべきだという。Vgl. Ders.: Geschichte und Ideologie im historischen Roman des Dritten Reiches.In:a.a.O.,[Anm. 9 ],S.197. Und auch 濱崎一敏: a.a.O., [Anm. 7 ], S.150-151.

- 11) Vgl. Klaus Vondung: Der literarische Nationalsozialismus. Ideologische, politische und sozialhistorische Wirkungszusammenhänge. In: a.a.O., [Anm. 8 ], S.44ff.
- 12) Vgl. ヒトラー「第一章 世界観と党、人種と人格に立脚する民族主義的態度」、『わが闘争』(下)、平野一郎・将積茂 訳、角川書店、昭和五十五年(十版、昭和四十八年初版)、S.26. Und auch Adolf Hitler: 1. Kapitel, Weltanschauung und Partei, Völkische Einstellung auf Rasse und Persönlichkeit. In: ders: Mein Kampf, 2. Band, Verlag Franz Eher Nachfolger, G.m.b.H.München 1927, S.12.
- 13) Vgl. ヒトラー「第十一章 民族と人種」、『わが闘争』(上)、同上 訳、同上 書店、昭和五十五年(十二版、同上 初版)、S.404ff. Vor allem S.413. Und auch Adolf Hitler: 11. Kapitel, Volk und Rasse.In: ders: Mein Kampf, 1. Band, III. Auflage, a.a.O.1927, S.300ff. Vor allem S.306.
- 14) Adolf Hitler: Mein Kampf, a.a.O., S.307. ちなみに1942年(昭和17年)眞鍋良一によって翻訳刊行された『吾が闘争』上巻、興風館、においてはこの一節「文化の創造者としてのアーリア人種」以下五つの節が訳出されないままになっている。平野一郎によれば、それは日独伊三国同盟(1940年)のためであって「両国間を離反せしめる」というのが削除の理由であったという。Vgl.平野一郎「訳者序」、『わが闘争』(上)、a.a.O., S.8.
- 15) Vgl. Adolf Hitler: a.a.O., [Anm. 12] .
- 16) Vgl. ヘルマン・グラザー『ヒトラーとナチス<第三帝国の思想と行動>』、関 楠生 訳、社会思想社、1987年(第24刷、初版1963年)、S.45.
- 17) アルフレット・ローゼンベルク『二十世紀の神話』、吹田順助・上村清延 訳、中央公論社、昭和13年、S.X V.
- 18) a.a.O., S. I .
- 19) Vgl. a.a.O., S.275.
- 20) a.a.O., S.254.
- 21) Vgl. ヘルマン・グラザー、a.a.O., [Anm. 16] , S.53.
- 22) Joseph Goebbels: Kunst und Politik. [Antwort auf eine Umfrage]. In: Der Scheinwerfer 5 (Dezember 1931) H. 7, S.15-16. In: Weimarer Republik. Manifeste und Dokumente zur deutschen Literatur 1918-1933, Hrsg. von Anton Kaes, J.B.Metzler Stuttgart 1983, S.552.

- 23) Ein volksbewußter und artgerechter Lebenskörper. In: Neckarzeitung, Heilbronn, vom 10.6.1933. In: Joseph Wulf: Literatur und Dichtung im Dritten Reich. Eine Dokumentation, Ullstein 1983, S.35.